大阪府高槻出土の独鈷状石器をめぐって

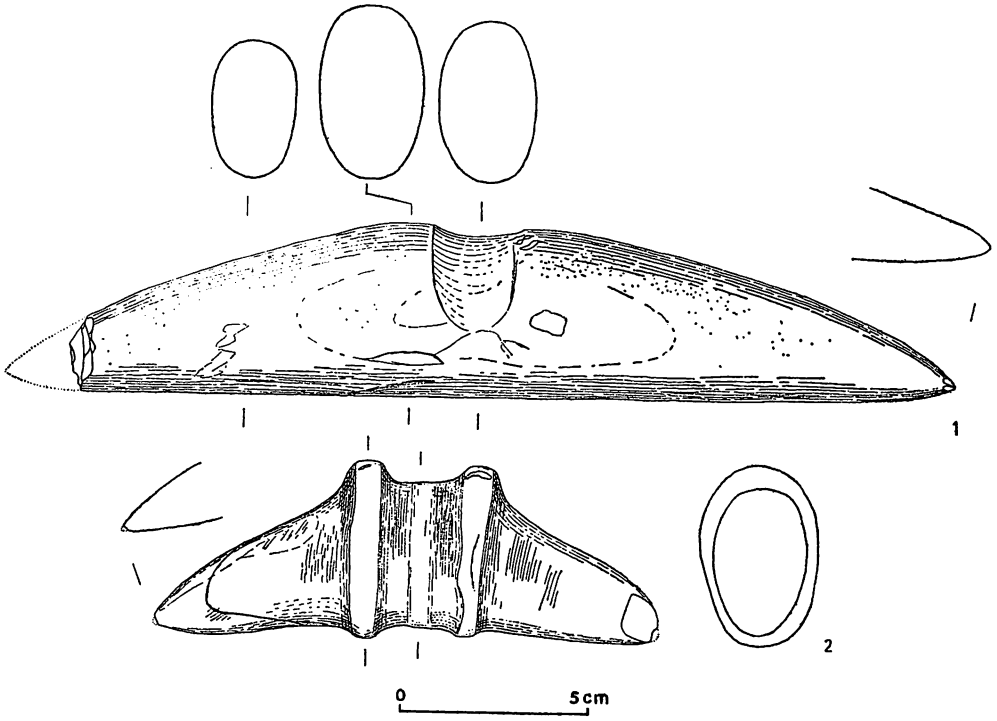
渡　辺　　誠

1

独鈷状石器は縄文晩期に特に発達し，東日本に濃密に分布する。その数も約600例にのぼる。その用途に関しては，族長権の象徴と推定され，他の石刀等の石器との関連も注意されている。

この東日本に特徴的な石器は，多分後期末に東北地方に出現し，晩期初頭には関東地方に南下し，さらに西方にも伝播しているらしい。その西限は従来近畿地方の一角滋賀県までと考えられていたが，近年裏日本側では兵庫県北部の香住町下浜字カオンドウまで確実にたどれることになった。①表日本に関しては，ここに紹介する大阪府高槻付近出土品までたどることができるようになった。

このように典型的な独鈷状石器の分布範囲が，より西方に拡張して確認されたことは，中国・四国・九州地方に分布する西日本型ともいうべき，東日本例とは若干形態の異なる独鈷状石器を考える上でも注目される。



独鈷状石器実測図

2

九州では，西日本型の独鈷状石器を始めて紹介したのは梅原末治氏である。同氏は『人類学雑誌』第59巻第7号（昭和19年）の巻頭に，「大隅発見の異形石器」を執筆され，鹿児島県囎唹郡志布志町大字潤野字出口出土の2例と，川辺郡笠砂町大浦出土の1例との3例について，『夙に知られた本州中部から関東地方に遺品の多い所謂石鈷との類似が自から考へられるのである』と，述べている。現在に至るまでこれら3例は，分布上その南限を画している。

次いで報告されたのは，下川達弥氏による長崎県佐世保市烏帽子岳出土例である（『佐世保の古代文化』，昭和38年）。長崎県下では他に島原市礫石原遺跡出土にかかる古田正隆氏採集品があることを，下川氏より教示されている。

昭和39年発行の『鹿島市史』第1巻には，佐賀県鹿島市鹿島小学校々庭出土例が掲載されており，近年木村幾多郎氏も改めて報告している。図1に示す例であり，西日本型の典型的な例である。下面は水平で，上面が傾斜して先端がかなり鋭く尖っているが，左端を欠く。中央の抉り部分は鍔状をなさず，鞍状に上面にのみ抉りこみがみられ，典型的な東日本の例とは趣きを異にしている。安山岩質で，現存長23.4cm，推定全長約25cm，最大巾4.7cmで，右尖端部には刄こぼれが認められる。

九州の例は以上の6例であり，鹿島小校庭出土，現祐徳博物館保管例を代表とする直線的なものから，潤野出土例の如く極端な彎曲を示すもの，軽く彎曲する烏帽子岳例等があるが，いずれも厳密には伴出時期は不明であり，前後関係は決し得ない。

四国では2例ある。別府大ＯＢ（現岡山県教委）の松本和男氏，愛媛大学教授西田栄氏等の御教示によれば，愛媛県下より少なくとも2例は出土している。

中国地方では，古く倉光清六氏が報告した鳥取県佐伯郡宇田川村（現淀江町？）上淀字住持給より出土した例があり，西日本型独鈷状石器の最も古い報告例である（「異型の石製品―伯耆かわら山麓遺跡発見―」，『考古学』第3巻第6号，昭和7年）。写真が示され，「一見独鈷石に類するが，しかしそのくびれは全周囲に施されて居らない。側面から見ると，丁度鞍を置いたような形である」と述べ，西日本型の特徴を良く伝えている。

広島県比婆郡口和町大月の出土例は，潮見浩氏等によって報告されている。②

九州の6例，四国の2例，中国の2例と西日本型独鈷状石器は計10例が知られており，その東限は鳥取～広島～愛媛県であり，東日本の典型的な例は兵庫県～大阪府までである。したがって裏日本側では近接し，東日本では岡山・香川県か空白部分をなし，今後の資料の増加が期待される。

3

本題に戻り，大阪府高槻付近出土の独鈷状石器を紹介する（図2）。

本例は江戸時代の出土品であり，現在滋賀県草津市の西遊寺に伝えられている。本例には「津国高槻僧ケ聖ノ谷」と墨書され，別に伝わる『諸石集記』には，「神代石并壺，（寛政10年）8月3日小倉東左衛門恵，津国高槻近山僧ケ聖リト云山谷ヨリ穿出ス」と記載され，符合する。また壺と

あるのは須恵器で，独鈷状石器同様の墨書が認められる。また当寺の家系図によれば，小倉東左衛門尉頼之は摂州高槻の御家人で，当山１４世正随の妹の夫に当り，15世の正蹁が木内石亭と親交のあった愛石家であり，本例の収集者でもあった。なお石亭・正蹁の交遊については，斉藤忠著『木内石亭』（昭和37年）に詳しい。

図２に示す如く，中央に鍔状隆帯が対をなして一周し，両端が尖っている。両端は若干の欠損がみられるが，全長13.3㎝，中央部巾4.0㎝，厚さ2.5㎝，鍔の巾4.9㎝，厚さ3.2㎝であり，安山岩質である。下面はごく軽く彎曲し，上面が大きく彎曲して，両先端を結ぶ線が中央部下縁近くに下っている点等から，晩期中葉の形態と推定される。

寛政10年（1798年）以来175年もの間確実に伝世された重要な資料である。木内石亭家が今日に跡をとどめていないことと比べれば，一層その感を強める。

なお僧ケ聖リという地名が，今日の何処であるのか判明していない。識者の御教示を乞うものである。

4

独鈷状石器は，一方では北海道まで伝播するが，形状に大きな変化はない。大阪府・兵庫県までの例も同様でありながら，より以西の地域で変容を遂げていることは大いに注目されるところである。この変容を生ぜしめた主体を如何に復元し理解するか，換言すれば西日本晩期縄文時代の地域社会を如何に設定し，体系化するかということになるが，本資料がこの問題の解決の一助になれば幸いである。

またこうした東日本型の特殊な石器が，一時的といえども九州にまで影響を与えたことのあることを再確認しておくことも重要であろう。石剣・石刀の分布にも類似した現象が認められる。

註

① 拙稿「兵庫県城崎郡香住町の縄文町代遺物」（『古代文化』第23巻第４号所収、昭和46年）。

② 潮見浩他「広島県比婆郡口和町常定峯双遺跡群の発掘調査報告」（『広島県文化財調査報告』第７集所収、昭和42年）。